夕刊フジ　2021年5月22日（21日発行）

ニッポン臨終図巻

ドクター和の

206　バーテンダー　井山計一

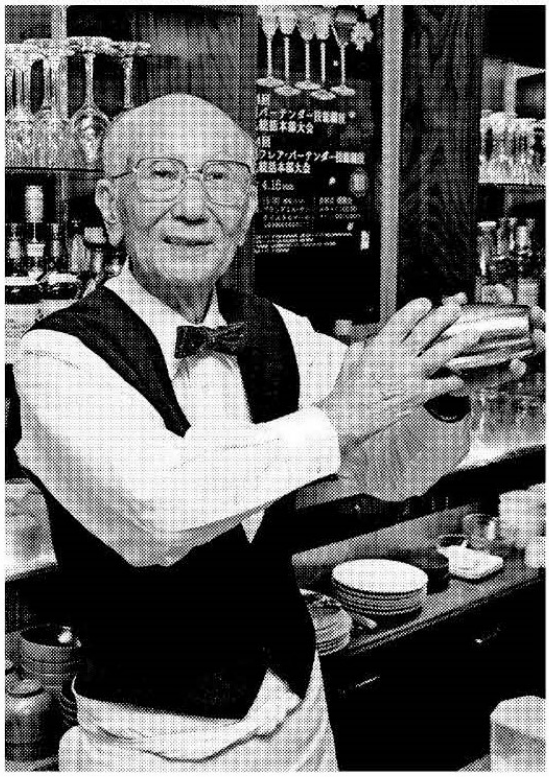
「今日が大事」言葉に重み

僕はワイン派なので、洒落たバーに行っても、カクテルはよくわからないから注文することはほとんどありません。しかし以前、山形に講演会で伺ったとき、地元の人が連れて行ってくださったバーで頂いたこのカクテルのことは、今でも印象に残っています。

ライムの香りが爽やかな、程よい苦みのウオッカベースのショートカクテル。白と緑のコントラストがなんとも美しく、グラスの縁には粉雪のように砂糖がまぶしてあります。飲むうちに現れるのは、エメラルド色をしたミントチェリー。幻想的で、大人の雰囲気の酒でした。

「このカクテルの名は、『雪国』というのです」――山形が生んだ、世界的に有名な逸品であるということも、このときに教えてもらいました。

この素晴らしいカクテル「雪国」の生みの親であり、国内最高齢のバーテンダーであった現代の名工・井山計一さんが、5月10日に亡くなりました。享年95。死因は、老衰との発表です。



大正15年に山形県酒田市で生まれた井山さんは戦時中、東京の軍需工場で働いていました。下宿に焼夷（しょうい）弾が落とされた日は、たまたま夜勤だったため命拾いしたそうです。召集令状が来たのは1945年8月17日だったため、戦地に赴かずに終わりました。その後、福島のキャバレーでバーテンダーとして働いた後、55年に酒田に戻り、「ケルン」というお店をオープン。オリジナルカクテル「雪国」が、コンクールのグランプリに輝いたのは58年のこと。それから65年もの間、「ケルン」でシェーカーを振り続けた人生は、2018年に「YUKIGUNI」というドキュメンタリー映画にもなっています。

昨年のインタビューで終活について問われた際、「死ぬの、生きるの、僕は一切考えない。何より今日が大事」「最近は〝終活〟っていうのが流行らしいけど、僕には意味不明。そんな活動をしている暇があったら、面白い話を考えているほうが全然いい」と語られていたのが印象的でした。戦禍を生き延びた人だからこその重みがあります。

今、まるで第三次世界大戦の様相を帯びてきたコロナパニック。病院に見捨てられた陽性患者さん達を分刻みで往診しながら、今日という日を生き延びられたことが尊く感じられます。そして、「平穏死」や「終活」という概念が、いかに平和な社会に裏打ちされたものだったかを実感してもいます。

嗚呼、早く平和な世の中に戻って、心おきなく酒が呑みたい。次にバーを訪れた時は、絶対に「雪国」を頼もうと決めました。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。